

# コタンメール

第9号 2003. 2. 10発行



## 第2回 ポロトコタン冬の暮らし展 開催

ドーンという開幕を告げる花火の音とともに、「第2回ポロトコタン冬の暮らし展」(同実行委員会主催)が去る2月8日(土)・9日(日)の両日、アイヌ民族博物館とミンタラ(白老観光商業協同組合)を会場として開催されました。今回は昨年比に暖かく、2日目はあいにくの雨で、会場に設置された滑り台やかまぐらのコンディションが思わしくなく、お子さん方にとってはちょっと物足りなかったかもしれませんが、町内外からたくさんの皆さんにご来場いただくことができました。

この催しは、例年開催されてきた「どさんこ冬まつり」に代わる行事として、アイヌ文化を中心とした冬の催し物としてリニューアルされたものです。会場のミンタラ内では、青森県森田村のりんご販売、北海道ウタリ協会白老支部婦人部の皆さんによるユクオハウ(鹿汁)(8日のみ)、チェブオハウ(魚汁)、イナキビご飯の試食体験、甘酒の販売、このほかアイヌ文様彫刻体験、アイヌの冬の暮らし写真展などが行われました。

アイヌ民族博物館では入館者の皆さんに青森りん

ごがプレゼントされ、園内には「クチャ」と呼ばれる狩小屋を設置しました。体験学習館では北海道ウタリ協会白老支部婦人部の皆さんが製作したアイヌ刺繍作品の展示販売が行われ、1号チセでは白老民族芸能保存会の皆さんと当館職員による古式舞踊が披露されました。

館内映像展示室では記録映画上映会を開催、アイヌ文化に関する3作品が上映されました。2日間でのべ200名のお客様が訪れ、熱心にスクリーンに見入っていました。

館内で同時開催中のテーマ展「まちの工芸品展」(3月31日まで開催)は、ご来場の皆さんに心ゆくまで観覧していただくことができました。

会場内のあちらこちらで、親御さんや職員にアイヌ文化について尋ねるお子さんの姿も見られ、来場して下さった皆さんがどんなに素朴な疑問でも何かを感じてくれていることに気付かされました。素朴な疑問がやがては文化を理解し伝承することへ繋がっていくことと信じて、来年へ向けまた一步近づいて行きたいものです。(伊藤栄子)

### 「まちのアイヌ工芸品展」開幕

白老在住の15人のアイヌ工芸家の作品を紹介。伝統工芸ばかりでなく彫像などの現代作品まで、従来のアイヌ民族博物館とはひと味違った展示です。この機会に、ぜひ足を運んでみて下さい。

「ポロトコタン冬の暮らし」関連事業。

出品者：能登康昭／山田祐治／野本リヨ／山崎シマ子／工藤栄子／野本テツ子／村木ハツヨ／松永八重子／下河ヤエ／近藤ノリ子／新井田幹夫／山丸郁夫／熊野薫／河岸麗子／花岡ケイ子(敬称略)



博物館特別展示室で3月31日まで開催

絵本

## ポロシルンカムイになった少年



語り手：川上まつ子  
絵：北市哲男  
文：中村 齋  
A4変形32頁  
総カラー  
定 価：1,000円（税込）  
2002年11月、第2版発行

昔からアイヌの尊い神さまが住む山として知られる日高山脈・幌尻岳。ふる里を離れ、和人の国で父を知らずに育った少年は、ある日母から告げられます。「実は、お前は幌尻岳の神の息子」。少年は幌尻の神（ポロシルンカムイ）となる運命を背負って一人旅に出ます……。

日高地方に伝わる昔話が復刊されました。

この物語は、アイヌの口承文芸の中でもウエペケレ（散文の物語）と呼ばれるもので、川上まつ子さんがアイヌ語で語ったものは実に45分間にもおよぶものでした。アイヌ語で話し合い、平和な暮らしをしていたひと昔前は誰もが炉を囲んで物語を楽しみ、物語からたくさんの教えをうけていたのでしょう。ぜひ一度、読んでみてください。

### まめ知識3

### フムフム鳴く鳥何の鳥？ の巻

「ホーホー… 私はシマフクロウ、このコタンの森の守り神」。博物館の二階にいと、下の方からそんな声が聞こえてきます。この声は博物館の一階奥にあるジオラマ「コタンの森」の音声で、動物の剥製や家の模型などを使ってコタン（アイヌ集落）の一日を再現しています。お客様がその前に立つとセンサーが感知して「ホーホー」と始まる仕掛けです。

ジオラマでは本物の鳴き声を録音して使っています（もちろん「私はシマフクロウ」と言っているのは役者さんですのでご安心を）。声の主シマフクロウは、アイヌ語でコタンコロカムイ（村の守り神）とかカムイチカブ（神の鳥）と呼ばれ、昔からヒグマと並んでアイヌにとって最も尊い神様とされていました。今でも博物館ポロチセの祭り神です。

ところでこの鳴き声、みなさんにはどう聞こえますか？「ホーホー」と聞こえるのが当たり前と思ったら大間違い。昔のアイヌの人たちはこれを「フムフム」と聞きました。一名フムフムカムイ（フムフム言う神様）と呼ばれるゆえんです。

ちょっと小難しい話になりますが、アイヌ語のウとオの音は、和人にはとても区別が難しい音で、昔の文献はアイヌのことをアイノと書きましたし、アイヌ語地名を見ても、ヌブルベツはノボリ



ベツ（登別）に、モルランはムロラン（室蘭）に、タロマイヌプリはタルマイノボリ（樽前山）に、ウとオの母音が入れ替わってしまっています（ローマ字で書いてみるとよく分かります）。

アイヌ語の母音はアイウエオの5つで日本語と同じなのですが、実はウの音は日本語とちょっと違っていて、言語学者さんの間でも「唇をすぼめる発音」だとか「いや唇はすぼめないが、もっと口の奥の方で発音するので、ウとオとの中間のように聞こえる」とか…まあ、要するに日本語にない難しい音だということです。

シマフクロウは、あの口では唇をすぼめようにも無理でしょうから、口の奥の方で発音しているのでしょうか。それで私たちには「ホーホー hō, hō」と聞こえても、昔のアイヌの人たちには「フムフム hum, hum」と聞こえた（ム m は口を閉じた音で無音に近い）。

シマフクロウは国の天然記念物で、今や絶滅危惧種。そういえば、ジオラマ「コタンの森」の守り神も、最近の入場者が減ったせいかわずらわく鳴く回数がめっきり減ったような。そういえば裏山にあった散策路、本家「コタンの森」も、国有林借地料が重荷でおとし廃止したっけ。そういえば「アイヌ（人間）とカムイ（神）が共有する国土」だったはずの北海道も、今やアイヌもカムイも住みづらいご時世。ちょっと「コタンの森の守り神」さん、フムフム頷いてる場合じゃないってば。  
(安田益穂)